未来の予測と、あらゆる分岐について

高山羽根子

自身の小説が初めて出版物に掲載されたのは、SFジャンルの小説賞によるものでした。その後さまざまな文芸誌に書かせていただく機会が増えたものの、やはり今でもSFの雑誌や本に小説を書くことは続けていて、日本でいういわゆる純文学とSF、軸足をどちらに置いているかという部分は曖昧なまま、今まで書くことができています。

私がSF作家としてデビューできたのは、当時、その小説賞の選考委員であった翻訳家の大森望氏に評価して頂いたというところが大きいと考えています。大森氏は現在、日本で「三体」を共訳、出版したことで知られていますが、拙作「首里の馬」については「劉慈欣『三体』三部作の第三部と同じテーマを扱っている」と大森さんに評して頂き、文庫の解説も書いていただきました。

小説を書いて生活をするようになってから十年ほどが経ちますが、それから現在まで、この世界ではいろいろなできごとが起こりました。私がSF作家でもあるためでしょう、この数年では小説を書く仕事のほか、この様々な困難の生まれる社会の中で人はどのように振る舞うべきか、科学的な観点や未来予測などの意見や考察を求められることも増えました。具体的には大震災や原子力など自然の脅威と科学技術との折り合い、疫病対策や移民問題、あるいは最近では、SNSと情報のあり方、デマ、ジャーナリズム、著作権といった財産やAIとの付き合い方など。学校や企業、ときにはテレビやラジオの番組でもお話をします。一度、日本のテレビ番組の企画で、劉慈欣氏ともオンラインで共演する機会がありました。たしかそのときのテーマも「人類は何によって絶滅するか」という未来予測めいたものでした。

そうはいっても私自身は科学者ではなく、また当然ながら占い師でもありません。未来を予測することは物語を構築する上でとても大切な要素ではありますが、逆を言えば要素のひとつでしかないともいえます。フィクションライターとして、私たちは要所要所で慎重に嘘をつくことも厭いません。

学校や企業、またあらゆるコンベンションで意見を求められるとき、私は戸惑い、逃げる言い訳のようにして、次のような言葉を口にします。

「私は予想屋ではありません。それは、いくつか在る選択肢のうちのひとつを選び取ってみせるのではなく、その選択肢にない別の、思いもよらない選択肢を新た

にこしらえる仕事に近いのだという意味です。だから、ときには偶然に予言めいた作品が生まれるかもしれませんし、あまりにも出鱈目で、読む人がひどく混乱する作品ができあがる事もあるかもしれません」

個人的には、全然見当ちがいな未来の物語よりも、当たってしまいそうなものを書いたときのほうが心の負担が大きいです。宝くじや競馬と違って、当たってもあまり得になることはありませんし。

日本の批評家であり小説家でもある東浩紀氏が、あるトークイベントの中で「今の社会で哲学者や思想家というものが商売として成り立つとしたら、それはSF作家という形を取るのかもしれない」と言っていたのが、とても印象深いです。

今年の十月、中国の成都でSFのコンベンションであるワールドコンが開催されます。このコンベンションは、北米で生まれ、毎年世界のどこかで開催される恒例のものです。非営利のファン団体がボランティアで誘致委員会として立候補し、その中からワールドコン参加者による投票結果によって会場が決まります。毎年ワールドコン会場では各国の誘致委員会がPRしています。今回の成都開催は、2007年の第六十五回大会になる横浜での開催から十五年、二度目のアジア開催です。

私がフィンランドのヘルシンキで2017年に行なわれた第七十五回ワールドコンに参加した際、ワールドコンを広州に誘致しようとしていた方々や、汎アジアでのコンベンション開催を目指す方々など、中国人が非常に多かったことに驚きました。そこに参加していた若い人たち（非営利団体のため、おそらく学生さんが多かったと思います）には、日本の作家を知る人も多く、拙い英語でいくらかの話をしたのを覚えています。彼らは若く、利発で、明るい人たちでした。その後、2020年のニュージーランドでの開催時には、感染症の影響で完全なオンライン開催になってしまいました。そのとき私は、あのときの成都の彼らは、あるいは韓国の若い作家たちは、インドからやって来ていた彼らは、みんなどうしているだろう、と考えていました。

この文章は六月の末、韓国の光州で書いています。ここではアジアでもかなり大きな規模の現代美術ビエンナーレが開催されていて、今回は世界のいくつかの国がパビリオン形式で展示をしていました。テーマは「soft and weak like water（天下に水より柔弱なるは莫し／天下莫柔弱於水）」でした。老子の道徳経（第七十八章）からの引用です。春秋時代のこの哲学者の言葉が、現在の美術作家、特にアフリカや中東の作家にどういう意味をもって響くのか、大変に興味深い展示でした。水は災害にも、あるいはエコロジーにも、疫病にも繋がっていくマテリアルです。人体の多くの部分は水ですし、恐らく歴史の上で、火よりも水によって命を落とした人間のほうがずっと多いでしょう。老子の先の一節が「しかれども堅強を攻むるは能く之に先んずる莫し（而攻堅強者莫之能先）／其の之を易ふる無きを以てなり（以其無易之也）」と翻っての水の強さに続くように。

科学技術は明るい未来を照らすものではあるいっぽうで、その光には影もできます。選択肢をひとつに絞ることは、そ

こにひとつの力を注ぐことで大きな推進力をうみ、その方向が誤っていたときの修正は難しくなることもあるだろうと思います。小説家、芸術家など、現実の世界と繋がっているけれど別の虚構の世界を作り出す人は、科学技術が何をもたらすのか、人間はどうなるのかということについて、想像の力をもって、いくつもの選択肢を生みます。

水流にたとえるなら、河はいくつもの源流を持ち、合流し、また別れてを繰り返します。あらゆる地点に生まれる選択肢、その分岐の多さこそが重要なのかもと思います。

この韓国の旅は、私にとってはとても久しぶりの海外渡航です。この数年、行く機会がすごく減ってしまいました。ほかの、たくさんの方々と同じで。

小説家というのはどこでも仕事ができます。紙と鉛筆さえあれば、海底の潜水艦でも、山奥の牢屋でも書くことができます。それだけに、あちこち旅をしながら仕事をすることもできれば、いつまでもその場に留まってとじこもりながら仕事をすることもできます。とくに今は、手元のほんの小さな端末によって、オンラインで自動翻訳を経由しながら会議をし、意見を交わすこともできますから。

ソウルに到着した際、私の作品の韓国語版を翻訳してくださった先生とお会いしました。学校の先生をされていて、学生さんとも交流を持ちました。彼らは文学的な翻訳について勉強している人たちです。

旅先で、看板にスマートフォンを掲げれば自動的に簡単な翻訳が表示される技術が身近になっていくいっぽうで、文学の翻訳者には特殊な技能が必要なため、人手不足が言われることさえあります。今の技術がさらに進んでいくだろうこれからの社会で、私たちがなにを書き、なにをどう訳していくようになるのだろうか、という話を交わしました。

世界中のあらゆる物語がアーカイブされる図書館があったとします。そこに置かれた物語は作者の性別や国籍や身分が隠され、誰もがそれぞれの言葉に自動翻訳によって引き出して読むことができるとしたら、これらの物語に「エスニシティ」というようなものはどういうかたちで存在し、どう読まれていくべきなのだろうと思うことがあります。

世界には、その地域、時代ごとに生まれ続ける（ときには消え、いくつかは残り続ける）問題があります。軍人が書いた物語、女性が書いた物語、あらゆるものが鍵になるかもしれませんし、ならないかもしれません。そのことが大事です。国家的な問題も個人間の問題も、たとえば春秋時代と比べて複雑になっているでしょうし、その中でも変わらないものもあるでしょう。これらの問題を科学や、あるいはなにか哲学的なもので対処していくとき、そこのほんの端に、未来への予感めいた物語が役立つことがあるかもしれません。ただ、その選択肢は不要なものとして当たり前のようにうち捨てられるかもしれないのです。

このことが、おそらくすごく重要なことなのだろうと、私は思っています。

（作者紹介：作家、第163回芥川賞受賞）